

レバノン赤十字社水・衛生支援事業 最終報告書

報告者: 村中 千廣 (国際医療救援部主事)

派遣期間: 2019年6月3日～12月15日

派遣地: レバノン共和国

私は2019年6月初旬より、レバノン共和国へ派遣され、日本赤十字社(以下、日赤)が支援を行っているレバノン赤十字社(以下、レバノン赤)のシリア難民支援事業の事業管理業務を担いました。同国では現在、日赤は、現地姉妹社による3つの異なる事業を支援しており、その内の1つが、レバノン赤が実施している水・衛生(通称 WASH: Water, Sanitation and Hygiene)事業です。2019年12月13日をもって現地での業務を終えましたので、報告いたします。

日赤は全国各地のシリア難民非公式居住区にて実施される同事業への支援を2014年から実施しています。非公式の居住区はいわゆる「難民キャンプ」と呼ばれる場所であり、定住の意図がうかがえるようなコンクリート等の資材を用いた住居の設営は厳しく制限されています。多くの住民が木材の枠組みに、繋ぎ合わせたタープ(通称: ブルーシート)等を壁や屋根代わりに張り付けた仮設の住居を築き、風雨を凌いで生活しています。

今年の3月にシリア国内の紛争は9年目に突入しました。2011年以降、多くのシリア難民の流入先となっているレバノンには、今なお推定150万人(レバノン政府による)のシリア難民が滞在しています。多くの難民が同国東部のベカー高原や都市部から離れた南北のへき地で居住区を形成しています。人々は慢性的な貧困や劣悪な衛生環境に悩まされており、冬季には低気温や積雪、洪水などの厳しい自然環境にも直面しています。シリアの紛争を取り巻く人道危機の長期化と、レバノン政府による難民の帰還促進方針が相まって、現在シリアの人々は一層厳しい立場に置かれています。

2019年はナバティーエ県とベカー県にある計5つの難民キャンプへの支援を行いました。日赤はこれらの地域でトイレや給水タンクを設置すると同時に、水関連のインフラ整備を行い、感染症等のリスク削減とコミュニティーの自助力強化に努めています。

ナバティーエ県では3つのキャンプの他に、地元の受け入れコミュニティーへの支援も実施しています。シリア危機以降、もともと強固ではないレバノンの住環境等のインフラに対して、急激かつ大規模な人口流入が見られたため、各自治体におけるインフラ強化のニーズも高まっています。ナバティーエ県は南部がイスラエル、東部がシリアと国境を接する場所に位置しているため、歴史的にも長く情勢が不安定な土地として知られています。日本の外務省では危険レベル3と指定されており、視察に訪れる際にも事前に当局から通行許可証を取得する必要がありました。



レバノン東部の南北に及ぶベカー高原は国土の40%を占めており、農業が盛んな土地として知られています。ベカー県はベカー高原の南半分で形成されている行政区です。日赤は同県南部に位置するラシャーヤという町にある2か所のキャンプを支援しています。シリアとの国境も近く、ここでも多くのシリア難民が生活しています。

ナバティーエ県 – ハズバヤ

ナバティーエ県の最南東部に位置する同地域では、21世帯の計195人を対象に支援を実施しています。報告者の派遣期間終了時点で、全てのトイレと水タンクの設置が完了しています。赤十字による介入以前は、1つのトイレが複数の家族で共用するように割り当てられていたため、必然的に消耗が激しく、衛生面、利便性ともに高いとは言えない状態でした。当事業では、トイレと水タンクは、各家族に1台ずつ設置されるため、所有物としての管理意識が向上されることとなりました。報告者が現地を視察した際には、いずれのトイレも管理がなされ、清潔に保たれていました。



以前使用されていた共用のトイレ



新しく設置されたトイレ

ベカー県 – ラシャーヤ

ベカー県の南部に位置するラシャーヤでは、79世帯の計330人を対象に支援を実施しています。同国に存在する難民キャンプの数は2,000にも及ぶため、立地場所により生活に伴う困難の種類も様々です。医療機関や教育機関へのアクセスが悪いところが多いですが、ラシャーヤのキャンプは町からの距離が非常に近く、学校へ通えている子どもの数も多いため、心



以前使用されていた水タンクとトイレ



なしか外国人である報告者に対する警戒心も薄いように感じられました。



新しく設置された水タンクとトイレ



経年による劣化や洪水が発生した時の流出・転倒などを未然に防ぐため、タンクは直接地面には設置せず、地面のコンディションに応じて金属の土台の上に配置するなどして対処しています。必要に応じて地面を平らにする工事なども実施しています。

難民キャンプで暮らすシリアの人々との交わり

キャンプを視察する際には、レバノン赤のスタッフにレバノン赤の車両で連れて行ってもらいます。同国におけるレバノン赤に対する住民からの信頼は絶大であり、最も安全が担保され、受容度が高いアクセスが得られることがその理由です。事業地は首都圏から離れているため視察の時間は限られていますが、事業の進捗確認だけでなく、キャンプで暮らしている難民の方々に対するインタビューを実施しています。ラシャーヤのキャンプで暮らすマリアムさんがインタビューに応じてくださいました。



「私は 2012 年にシリアのホムスから来ました。レバノンへ来た頃は両親は働くことができていましたが、ストレス等の要因が重なり、母は中枢神経系の疾患を患ってしまいました。今は両親

共に寝たきりの状態です。二人の治療費を何とかして捻出しなければいけない状態です。父は通常の食べ物を食べるができなくなっているため、調合した療養食を薬局から購入しています。何とか1日1〜2食を食べさせています。(レバノンでの生活状況について)状況はあまり良くないです。国連から経済的な支援を受けられていましたが、3年前から支援が限られるようになりました。今は地主が賃料と電気代を支払っています。両親が病気をしていますが、病院に入院させることは経済的に困難です。多くの人がここへやって来てはただインタビューを実施します。質問への答えを得られると帰ってゆきます」。

マリアムさんは日赤の支援により設置されたトイレとタンクに関しては「良好です」と仰っていました。回答の一つ一つが報告者の心に重くのしかかるようなインタビューでしたが、「今後も支援活動を継続するために、現状を知らせたいので教えてください」と伝えると快く応じてくださいました。



ハズバヤのキャンプで暮らすチャドラさんは6年前にアレッポからレバノンへやって来ました。シリア最大の都市アレッポでも2011年から続く内戦の影響により、多くの市民が避難を余儀なくされました。3人のお子さんがあるチャドラさんは、将来への不安について話してくださいました。

「6年前にアレッポから(レバノンへ)両親と共にやって来ました。この地で結婚しました。レバノンへ来て以来、ずっとこの地域で暮らしています。(直面している最も大きな困難は何か、という問いかけに対して) – 人生そのものです…。不確かな将来に不安を覚えます。この地域はたびたび豪雨に見舞われ、大きな嵐が来るとテントは耐えられません。

この子たちが大きくなった時には学校に行かせたいと思っています。公立の学校は学費は無料ですが、入学にかかる初期費用や(学校までの距離が遠いため)通学バスの料金を捻出することができるかは分かりません。ボランティアの方々が巡回で授業を行っていますが、全てのキャンプが網羅されているわけではありません」。

同国で生活している150万人もの難民一人一人がこのような困難な状況に置かれており、それぞれ母国で体験した紛争から様々なトラウマを抱えているという事態の深刻さは、現場に

足を運んで直接お話を伺っても尚、あまりにも重大で想像が及びません。当報告をご覧いただいている方にとって、当報告書が遠い中東で起きている人道危機、そして身の回りで困難な状況に置かれている人々に対して意識を向けるきっかけとなれば幸いです。

今後とも日本赤十字社、大阪赤十字病院へのご支援をよろしく願いいたします。